新年を迎えて

しずない農業協同組合 代表理事組合長 片岡 博

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

組合員の皆様には、御家族ともどもご健勝で新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。日頃より当組合の事業運営に対し、ご協力とご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年は一昨年より続く新型コロナウイルスの世界的大流行がおさまらず、デルタ株やオミクロン株といった新たな変異株が出現し、日本経済のみならず、世界経済に大きな影響を与え続けておりますが、ワクチン接種が進み防疫と経済活動の両立が進みつつあります。世界的に経済活動が再開し始めた中で原油の需要も膨らんできておりますが、ＯＰＥＣを始めとする産油国は景気の先行きが不透明なことから11月の増産を見送り、それに伴い原油価格が高騰したことでガソリン類の価格も高騰しております。産油国としても新たな変異株を含む新型コロナウイルスの動向によっては世界情勢が一気に不安定になることからそれを見極めたいというところが本音であると思います。

当組合の基幹作物の１つである黒毛和牛において一昨年はコロナ禍の影響を特に大きく受けましたが、昨年の枝肉相場は去勢Ａ－５等級１ｋｇで２２００円から２６００円台で推移しており順調に回復しつつあります。ホクレン南北海道市場の素牛平均購買価格は去勢で83万円、メスで70万円と、昨年比較で８万円程度の高値で推移しており、新型コロナウイルスの流行以前の令和元年度と同水準に回復しました。市場動向につきましては新たな変異株を含む新型コロナウイルスの動向次第で楽観視できないことに変わりありません。当組合の年間の販売金額は６億５千万円となっており、購買者のニーズに答え、販売価格を維持するために、高齢牛の淘汰更新を積極的に進め、優良母系牛群の形成を進めてまいります。

昨年の農作物の状況としまして、水稲は日高管内は１０９の「良」でありました。春先の気温は平年よりやや高めで、６月頃までは良好に推移しておりましたが７月、８月の稲穂が実る時期に猛暑に見舞われ降水量も極端に少なかったため、収量、品質の面での不安がありましたが、タンパク質も含め高品質な米を収穫することが出来ました。また、昨年度は純米吟醸酒「海桜丸」の醸造を上川大雪酒造に変え、お米の味が凝縮されたすっきり・辛口で素晴らしい味わいとなっておりますので、ご賞味頂ければと思います。

ミニトマトの促成栽培については５月は昼と夜の寒暖差があり、出荷量こそ少ないものの糖度の高い物が収穫出来ました。その後６月にかけて出荷量を大きく伸ばし、順調に推移しておりましたが７月、８月の猛暑により実が肥大する前に着色が進み、収穫量が低下しました。抑制栽培への切り替えの時期には気温が30℃近い日が連日続いたため、高温障害により花数が多くなり実が肥大しづらい現象や、着果不良により収穫量が減少し、通年を通して収量を確保出来ませんでしたが、天候に恵まれない気象条件の中、生産者の日々の栽培管理の努力により、取扱金額は８億５千万円となり、青果全体では９億２千万円となりました。

本年も２組の新規就農者の参入が予定されており、ミニトマト部会が目標として掲げる10億円を目指して参ります。

酪農については、５月下旬から晴天が続き良質な１番牧草を適期に刈り取ることが出来ましたが、その後は雨が降らない月が続き、２番牧草が枯れてしまう状況となり、その収量不足を補うため３番牧草を刈る必要がある年となっております。また７月、８月は猛暑が続いたことで、乳量の減少という大きな影響を受けました。乳価は95円で推移し、販売金額は３億